

◆観光企画・作品賞

著者：遠藤英樹編著

書名：『フィールドワークの現代思想：パンデミック以後のフィールドワーカーのために』

出版社：ナカニシヤ出版

出版年月：2022 年 4 月

本書は、COVID-19 の感染拡大によって大きな影響を受けた「フィールドワーク」の内容と形式を問い直すとする企図から編まれたものである。14 の章から構成され、寄稿者の専門領域は社会学、文化人類学、地理学など多岐にわたる。編者が述べるように、本書全体として「フィールドワーカーの自己変容」「フィールドワーカーとツウリストの相互陥入性」「観光というフィールドの変容」などの緩やかな軸は設定されているものの、基本的にはそれぞれの寄稿者が自身の経験や学問的な背景を踏まえて、フィールドワークのこれまでとこれからを考察するという形態になっている。

本書の特長として、以下の 4 点を挙げることができよう。第一に、時代への即応性である。COVID-19 がもたらしたパンデミックを契機に、観光研究では「観光」に関わる事象や概念の問い直しが求められた。本書はフィールドワークという観光（研究）に不可欠な要素を再考することで、それに応えるものであると言えよう。また、パンデミックが終息に向かいつつある現在において本書（2022 年 4 月刊行）の記述を読むと、往時の思考や印象、あるいは情景が引き出されるように感じられる。こうした、同時代的な研究者の記録としても本書は意義のあるものではないだろうか。

第二に、本書全体として、フィールドワークの実践そのもの、およびその対象の多様性を描出している点がある。文化人類学の民族誌調査はもちろん、社会学や地理学におけるフィールドワーク、さらにはトラベル・ライティング（11 章）、オンライン空間の調査（12 章、13 章など）も本書は射程に収めている。それらを、フィールドワークが実現困難な状況下で再考するというスタンスで執筆されているため、フィールドワークのこれまでにおける実践と意義を振り返りつつ、これからのあり方を学問的に検討したという点で、まさに副題にあるように今後の「フィールドワーカーのために」有用な手引きになっている。

第三に、寄稿者個々人の経験が多く収められている点がある。フィールドワークは、本書の中でも繰り返し論じられるとおり、研究者とフィールドとの「共在」の様式であるため、研究者のフィールドにおける経験と思考の軌跡を辿ること自体に意味があり、またそれが本書の「読み物」としての面白さを担保していると言える。

しかしながら、本書は初学者向けの読み物であるかと問われればそうではない。レヴィ＝ストロースのような古典とされる研究から、インゴルドの「ライズ」など近年注目される研究までを基盤に、フィールドワークやフィールドワーカーという存在が学術的に問い直され、時に新しい意味や可能性を持つものとして提示される。この意味において、観光研究に対する学術的な貢献度も高い。

以上の点を総合して、本書は観光企画・作品賞に該当すると評価できる。